

ペスタロッチ研究の現在

— 生誕250年記念国際シンポジウム (1996) を中心に —

宮崎 俊明

(1997年10月15日 受理)

Trends der Pestalozziforschung

— ein Tagungsbericht über internationales Symposium
anlässlich des 250. Geburtstages Pestalozzis, 1996 —

Toshiaki MIYAZAKI

1: チューリッヒ

1996年1月、文部省の派遣で次の学会に参加、発表の機会をもった。「ペスタロッチ記念1996年—生誕250年ペスタロッチ影響史のための国際学術シンポジウム—」(Pestalozzi Gedenkjahr 1996—Internationales wissenschaftliches Symposium zur wirkungsgeschichtlichen Aspekte Pestalozzis anlässlich seines 250. Geburtstages—), ペスタロッチ研究所 (Pestalozzianum) とチューリッヒ大学が共催、ベルン大学が協賛の形で、期間は1997年1月15日から17日まで、会場はチューリッヒ大学とスイス連邦工科大学であった。また、そのあとペスタロッチ研究所でコロッキウム「アジア圏のペスタロッチ」があり、小さな報告を担当した。以下では、研究論文としてはその体裁を欠き、報告としては長く、かつ個人的にすぎるが、あえて綴ってみたい。

文中の人名については敬称等を省略し、かつその原綴りは初出に限って、その重要度に応じて示す。また、参照・引用についての本文での簡略表示(著者、出版年、該当箇所など)は末尾の「文献リスト」との照合で確認できる。筆者の発表内容については別稿でおこないたい。

1月12日は、ペスタロッチの誕生日である。その日のフランクフルト空港とチューリッヒに向う機中で入手したドイツとスイスの新聞は、予想どおりこの記念年を報じ、論評をのせていた。「ツァイト」はフリトナー (A. Flitner) の、「ノイエ・チューリヒャー・ツァイトウング」はシュタドラー (P. Stadler) の論説をのせ、前者にはドイツのリベラルの声を、後者には主催国スイス側の近年の成果を代表させ、あわせて新聞の傾向もみせていた。また、翌日の「フランクフルター・アルゲマイネ」にはエルカース (J. Oelkers) が筆をとっていた。その一方で、チューリッヒの「ターゲス・アンツァイガー」のタブロイド版「週刊チューリッヒ情報」は、赤、黒二色刷りのペスタロッチの顔写真を第一面全体に使うことで、その週の最大のイベントを報じていた (Flitner ; Stadler 1996)。

このチューリッヒには82年以来5回、通算2カ月ほど滞留した経験があり、街の様子はかなりの程度解っている。以前、駅前通りの広場に立つあの有名な銅像にみた落書「かわいそうなペスタロッチ！」も洗い落とされ、街頭の広告塔では展覧会の大ポスターが目をついた。今回のシンポジウムの会場になるチューリッヒ大学と隣接する連邦工科大学の中央棟、そこから200メートルほどの教育学科棟の近辺もこれまでの滞在でもうかなり慣れている。それはボン大学のデルボラーフ (J. Derbolav) によって著作・書簡全集の校閲に半世紀をついやしたデユンク (E. Dejung) とチューリッヒ大学のハーガー (F. -P. Hager) に紹介の手紙をだしてもらったことから始まった。15年前であり、もう3人とも鬼籍に入っていない。ハーガーの秘書の仲介であるキリスト教組織の経営する簡易ペンションに滞留、チューリッヒ中央図書館に通いつめた。図書館とペンションと大学とは、三角形をなす位置にある。ほとんど構内とっていい一角にはいまは資料館だがトーマス・マンの旧居があり、そこからペスタロッチの生家と転居先あたりは500メートル、かれが通った教会付設の学校も1キロたらずにある。大学のある高台の中腹からは旧市街地やチューリッヒ湖はすべて見おろせる。

翌13日の朝、発表関係者のほとんどが招かれて投宿しているホテル「チューリッヒ山」の部屋にシンポジウムの幹事役トレーラー (D. Tröhler) がみえて挨拶をかわした。この日の夕方からチューリッヒ市と研究所が共催する展覧会「ペスタロッチ—その映像、研究、夢—」のオープニングと立食パーティが、市街地であってその由緒をおもわせる古建築 (ストラウホーフ) の会場であり、かれ自身その展示の考証の中心に加わっているといつて招待状をくれた。それに翌日の記念年祝賀行事の座席券や市交通局発行の学会期間中の無料パスを受けた。午後は、ドイツのブランシュヴァイクからきた、こちらの研究上の恩人ホーフ (D. Hoof) にお供してペスタロッチのゆかりを歩いた。旧市街地にあるその旧居を訪ね、そこから狭い路地を50メートルほど入ったところに、青年期のペスタロッチを揺さぶり、ゲートも訪問したラーヴァターの家がある。その前の狭い公園の向かいの家にはレーニンのいわば隠れ家という銘版をみつけたりした。そして中央図書館の近くまできたとき、帰宅途中のワグナーとの奇遇があった。このひとは、15年まえ、古文書室で利用者の入退室に机上のボタンで開閉し、閲覧に供する文書のチェックをしていた3人のドクターのうちの若手だった。私はその部屋でペスタロッチの読書ノートの手稿 (マニュスクリプト) を批判版全集と比較してその漏れや異同を書きだす仕事を連日していた。マールブルクに戻る前に300枚にのぼるその手稿の、マイクロフィルムでなく電子コピーでの入手を許可してくれた当時の主任ラーヴァターはもう定年退職した、という。こちらがこうしていまチューリッヒに来ている目的はむこうが言い当てた。

2: ペスタロッチ記念年の計画

19世紀後半以来、ペスタロッチにはほぼ50年ごと、ときに25年を刻みにその生年や没年に多彩な

顕彰行事が開催されてきた。それ自体が興味深い研究対象となっているほどである。今回も国民的祝賀をねらって設けられた推進委員会には、次のような13の関係団体の官民の総勢85名の代表が参加している。連邦内務省、連邦議会、労働・経営団体、市民団体、研究奨励財団、福祉協会、学会連合、学校教育団体、教員団体、職業教育団体、ペスタロッチ協賛団体、大学連合、チューリッヒ州学校教育庁。これらによる年間を通じての企画行事には、祝賀祭、研究推進、教員啓発、展覧会、演劇、映画の催し、遺蹟探訪、出版助成、記念賞授与など40件が組まれている (Pestalozzianum 1994)。

このうち研究に直接関係するのは、大学連合だけだが、その11名のなかにはチューリッヒ、ベルン、フリーブルクの学長に混じって教育学研究者にはよく知られているハーガー、エルカース、オーザーといった、上の3大学の教育学科長、それに先のシュタドラーといった知名人が名を連ねている。また、この国際学術シンポジウムのプロジェクトは、組織委員会の事務局が担い、その長には94年に委員会が発足した当時のペスタロッチアヌムの所長ゲーリヒ (H. Gehrig) が、ふたりの副委員長にはその副所長で現所長のデメジュールとチューリッヒ大学教育学科のトレーラーがつき、その下に研究所員が配されていた。その上、この組織委員会にはチューリッヒとベルンの学長と正教授6人に加えベルン大学の新進の教授資格者オスターヴァルダー (F. Osterwalder) が入っている。加えて7人の名誉客員なるものを置き、うち5人がチューリッヒ大学の第2哲学部の現職のファトケとフェントラである。これも保守的な正統的大学チューリッヒらしいいかにもの構想とうけとれた。ちなみに、記念年に計上された予算総額は126万3千スイス・フラン (約1億3千万円)、シンポジウムにはそのうち11万スイス・フランが充てられている (Gehrig 1996)。

3：ふたつの先行シンポジウム (1987, 1994) とベルン派

ここほぼ150年間、ペスタロッチはウィリアム・テルとともにスイスの国民的英雄とされ、継承すべき伝統の遺産とされてきた。しかし、今日では研究の方法論の変化や蓄積、時代の動向からして、その神話化や絶対化は揺らいでいる。事実、1987年2月26～28日にベルン大学の主催で文字通り「ペスタロッチの遺産」と題したシンポジウムがベルン市立教育研究所を会場に開催され、スイスに特有の教員啓発の一面もあって300人ほどが参集していた。これに出席したときには、スイスのふたりの提案者以外は、今回のシンポジウムには姿をみせていないリートケ (M. Liedtke) とランク (A. Rang) のほか、すでに高齢のバルラウフ、ヴァイスコプフの定年退任の後継として着任した新進のエルカースといったドイツ人だった。その上、チューリッヒ大学とチューリッヒ・ペスタロッチ研究所の関係者は壇上の提案者にはいなかった。ハイデガー哲学に依拠するバルラウフはともかく、かれら3人はペスタロッチの生涯、人間学、政治思想などに不統一、矛盾、神秘を読み取り、かれの崇拜者の迷妄に反対しているのが十分うかがえた。サブテーマの「ペスタロッチの崇拜者に反対して」そのものだった。巨像ないし虚像への揺さぶりと実像への接近が、そこにはもう

みえていた (Gruntz-Stoll)。

1994年、半年間のドイツ滞在中、ベルン大学では6月23日と24日の両日、オスターヴァルダーを代表者とする研究グループの5年間のプロジェクト「ペスタロッチ —19世紀の教育影響史—」が終結したのを機にシンポジウム「コンテクストのなかのペスタロッチ」が開催されていた。これは、近代教育学の展開のコンテクストのなかでペスタロッチの人と業績を点検し再構成しようとする試みであった。9人の発表者のうち6人がドイツからの面々であり、他の3人のエルカース、オスターヴァルダー、ゴノンはずべてベルンの研究グループの構成員、最後者ゴノンは前二者が編んで95年に公刊する『ペスタロッチ —周辺と受容—伝説の歴史化の研究—』の一執筆者であっても、そのテーマは若干周辺的なものだった。元来、北ドイツのリューネブルクからきているエルカース、ベルリンからアムステルダムに出て、東西ドイツ統一後ベルリンに戻ったランク、ベルンからカールスルーエに転じるオスターヴァルダーを考えると、この集りもまた「スイス側不在のなかスイスで開かれたドイツ人によるペスタロッチ学会」といえた。特色的なのは、徹底して教育史的なアプローチと一件の発表に2時間近くもあてるコロッキウム形式であり、次のようなテーマで論議されている。

ペスタロッチの「教育学の基礎づけ」を先のランクがその近代性で、ハンノ・シュミット (H. Schmitt) がドイツ啓蒙主義の教育言説に位置づけてとらえた。また、その「教育学の対象と要求」は、エルカースが18世紀の徳論ないし人間論で、マールブルクのニーサー (O. Niesser) がフランスの学問論議でもって把握した。当然、シヨイエル (H. Scheuerl) らの『教育史』の刊行や若手のポスト・モダン傾向以来、近年よく問題にされる「教育学の古典・典型 (クラシック)」論議には、その著者自身や自他ともにみとめる中道派ヘルマン (U. Herrmann) を舞台に呼んでの議論が展開された。受容史の問題としては、「ベルンフェルト・シュプランガー・ペスタロッチ」という興味深いとりあわせや、20世紀初頭の新教育との関係が主題化されている。最後に本題の「コンテクストのなかのペスタロッチ」は、教育史記述の方法論とペスタロッチへの実質的な歴史上の再構成との二面からランゲヴァントとオスターヴァルダーが論じている (Hist. Komm. d. DGfE, Rundbrief 3, 17)。

この会合の直後、元はマールブルクにいて87年にそのゼミに出たりしたシュミットを統一後の任地ポツダム大学に訪ねた。このとき、かれは、そのシンポジウムの模様を話し、スイスでの受容史とチューリッヒの哲学的傾向を批判的に語ってくれた。「ペスタロッチ研究はもう終わったのでない、これからだ」、といったのが印象的だった。最近、かれからペスタロッチと同じ生誕250年のカムペの展覧会のために自らその中心になって作られた250頁の大版のカラー豪華本が送られてきた。それは「18世紀研究の宝庫」といわれるヴォルフエンビュテル図書館が出したカタログだが、ヘルマン

ほか15人の文章でなり、連邦文相がいさつ文を寄せている。研究の水準、その層、資金だけでなく自信のほども示している（宮崎 1996 c 119-121, 156-158；Schmitt）。

ベルンのエルカースとオスターヴァルダーとのペスタロッチ研究の傾向が文献的に確認できるのは、87年のシンポジウム、89年の「教育学雑誌」の別巻特集「フランス革命200年と近代教育学」でのかれらの論稿である（Oelkers 1987；Osterwalder 1989）。また、その後の展開では、個人的には、92年に小著がでた直後、ふたりの連名で2冊の献本を求めてきた、と発行元から聞かされ、やがてその11月、オスターヴァルダーからかれらのプロジェクトを強調した手紙とともに6編の論文がこちらに送られてきたことがあった。このうちエルカースの3編は、90年10月と11月、92年6月にかれらの研究会で発表した未公刊論文、オスターヴァルダーの2編も同じく89年1月のもの、それに国際誌「教育史」（*Paedagogica Historica*）の90年の第1号と「教育論集」（1992）の2種の別刷りだった。それから3年後、ふたりが共同編集し上の未発表論文4編と後者の2編が収録された『ペスタロッチ 一周辺と受容、伝説の歴史化研究—』が登場する。その序文にはこれらが89年から93年までの研究プロジェクトだったことが、ペスタロッチの誕生日を意識して95年1月12日に識されている。このチームはかれらの他に5名でなり、そこには当時ベルンに留学中だった伊藤敏子（宮崎産業経営大学、現三重大学）が、日本の受容の、アメリカ経由という特殊性や、福島政雄に典型的な宗教信仰などのために引き起こした原型からの偏りをいい、そのかぎりでもベルンの傾向を示している（Ito 1996）。

4：小著『ペスタロッチとその読書』

わたしが今回のシンポジウムへの招待状をトレーラーとオスターヴァルダーの連名で受けたのは94年の秋である。それは92年に『ペスタロッチとその時代の性』の著者ホーフの理解でドイツで出版できた『ペスタロッチとその読書』のためかと思われる（Hoof 1987；Miyazaki 1992）。この小著では、ひとつには28巻全集ではきわめて不十分なペスタロッチの読書記録をその手稿で検討し、シェーネバウムが校訂したその批判版の先行作業に助けられて、かれの問題関心や思想形成を時代の知的潮流にのせて類似性や影響関係を打ち出そうとしたものである。もうひとつには当時の定期刊行物5種と単行の版本など約60点から、かれが読んだり抜き書きした箇所を同定し資料集としての提供をねらった。

小著はペスタロッチが「本は読まなかった」「読めなかった」（Pestalozzi 1927ff. 8 - 243；13 - 196）というかれのテキストへの反証というよりも、むしろその後の受容史とそれと密接に関連してきた教育学への異論であり、ペスタロッチの独自性や天才性の相対化、あえていえば非神話化の試みでもあった。この問題提起が、たとえば、当時、国際教育史学会の会長だったデパーペ（M. Depaepé）のような研究者に教育史記述のパラダイム論での言及や、オスターヴァルダーの引用を

誘ったり、クラフト (V. Kraft) の精神分析的研究の方向の正当化を支える刺激をした面があったのは、すでに確認できている (Depapae 1994, 51f ; Osterwalder 1995 d, 184 ; Kraft 1996 a, 20)。しかし、今回の参加は、この3人の言及以前の刊行直後、ふたつの書評のひとつで、チューリッヒの若手トレーラーに「教育学雑誌」で正確を欠く発言をされた行き掛かりも、実は作用したかもしれない。この書評には、小著をその1巻として容れたシリーズの編者であるホーフが当誌の書評責任者であり、かつトレーラーと同僚であるファトケに反論の掲載を求める手紙を出したが、返ってきたのは、「慣行にない」というものだった。しかし、のちに96年にトレーラーが前言を修正するような記述を著者と小著の名を明記しているのも見いだした (Tröhler 1993, ; ders 1996 b, 228)。研究と批判は循環する。

5 : 記念年祝賀行事

「記念年」は、1月12日の誕生日当日、すでにイヴェルドンでの小さな会合で開始されていた。しかし、国民的行事をねらった大々的、公式的な会は14日の日曜日にチューリッヒのシャウシュピールハウス (劇場) で祝賀の火ぶたがきられた。教育者の生・没年の顕彰行事には故人にちなむ演劇がつきものである。たとえば、94年、ロッホのもとで教師だったブルンスの没後200年記念コロッキウムをのさい、かれらが活動したブランデンブルク州の片田舎の教会でふたりに扮した村の学童による劇があつたりしたが、ペスタロッチの場合の今回の出し物は、以前によくあつたその作品『リーンハルトとゲルトルート』の劇化ではなく、学園の細部に光をあて、ドイツ生まれの音楽教育家、出版人、作曲家だったネーゲリ (H. G. Nageli) を登場させた。かれは1809~10年にイヴェルドンのペスタロッチ学園にいて、共著で『ペスタロッチの原理に基く歌唱教育論』を出したり、ベートーヴェンの知人、さらにはコッタ版の予約講読者でもあつた、かれが、学校創立式典にさいし、友情と喜びに寄せて作った音楽劇が祝賀行事の中心になっていた。また、すでに幼児期に父親にともなわれてブルクドルフの学園を訪問、のちにウィーンでベートーヴェンに習い、1816~7年にはイヴェルドンの学園の音楽教師を務めたシュニーダー (F. X. Schnyder v. Wartensee) の歌曲が、チューリッヒの合唱団と小学校6年生によって歌われた。さらに加えて、ペスタロッチとアンナ・シュルテスとの婚約時代の手紙も朗読された。このあと、近年出た2巻本の『ペスタロッチ — 歴史的伝記 —』の著者、チューリッヒ大学の近代史の名誉教授シュタドラーによる短い記念講演があり、かれがスイス側の代表格であることを千人の招待・参加者に印象づけた。最後にひとびとは一台のオルガンの音に耳を傾けた。この楽器はかつてペスタロッチの学園で使われながら、その後売りに出されて人手に渡ったが、州立博物館によるその買い戻しをへて1904年以来ペスタロッチ研究所に納まっているものだった。これでもって記念年の祝賀プログラムのすべては終了した。

その日の午後は、翌日から3日間の学術シンポジウムの講演者と発表者が、この種の学会によくある前日の「顔合わせ」のために旧市街にあってその内装も往古をしのばせるレストラン「ツンプ

